

親の跡を継いで何が悪い

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

安倍晋三氏による記録的な長期政権に終止符が打たれた直後。次期総理大臣候補として「影の総理」の異名を持つ菅義偉氏が、まさかの出馬（周到な準備をしていたとも囁かれていたが）。

その瞬間、レース前から立候補を公言、やる気満々であった岸田文雄氏、石破茂氏が、下馬評で脱落。菅氏を応援するべく現実的な派閥調整が迅速に成され、瞬間的に岸田、石破両氏の当選の目はゼロとなり、選挙区から急遽上京した奥様の手料理やカレーライスを頬張る姿のパフォーマンスも空しく、2位争い扱いに陥った。

小柄で朴訥とした雰囲気菅氏。官房長官時代は自分のアピールを抑えていたわけだが、出馬宣言では、はっきりとした口調で、自身の生い立ち、原点、国を変える決意を語った。

雪深い秋田県の農家長男で高校卒業後、就職のため上京し、町工場で働き、学資を蓄え、学費の安い法政大学を卒業し、縁をつくった議員秘書から地方議員となり、機を見て国政に進出。

このような「苦勞人」「庶民派」アピールで一気に勝負に出たわけだ。

これをやられたら、世襲議員である岸田氏と石破氏の立つ瀬がないのは明らかである。

そこで考える。総裁選は国民投票で

決まるわけではないが、日本人は、いつの時代も、このような立身出世物語が大好きである。そして、今回の総裁選レースを紹介しても、「たたきあげ」は清く強く、「跡取り」は頼りない、世襲は罪悪と、一元的に片付けられることとなった。

これでは岸田さんと石破さんは、気の毒すぎないか。

親の財産を食いつぶし放蕩する跡取り息子がいることも確かだが、世界中で、突出して中小のファミリービジネスが多い日本の家業継承者の大概は、物心ついた時より、親の仕事や振る舞いを見つめつつ、跡取りのアドバンテージを謙虚に自覚し、若い頃から遠慮をしたり、強気に出たりと、自身の立場をわきまえているはずだ。

だからこそ平和な社会が保たれているものと信じている。

親の記録を塗り替えるスポーツ選手、農業や漁業などの一次産業。コロナ禍で苦戦する飲食業や宿泊業、小売店。もちろん医療機関もわかり、皆が自分の代で暖簾を下ろすことのないよう必死で頑張っているはずだ。

そこで岸田氏と石破氏。小さい頃から父親や祖父の後ろ姿を見つめ、政治の威力、限界。政治家の偉さ、愚かさ

を肌で感じ、地元有権者に頼られ励まされ、勉強して早稲田と慶應に進学して、若いうちから大人と上手に付き合っで、総理大臣候補にまで登り詰めた男である。

ひ弱な、おぼっちゃま君で喧嘩が弱いはずがない。

Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。
北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。
東京女子医大、筑波大大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。
日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。
伊藤病院 <http://www.ito-hospital.jp/>
名古屋甲状腺診療所（名古屋分院）<http://www.kojin-kai.jp/nagoya/>
さっぽろ甲状腺診療所（札幌分院）<http://www.kojin-kai.jp/sapporo/>



表参道日記